

正月廿一日
16
金春七左衛門殿参

ある。いま、またおまえに、家に伝わる秘事を残らず授けることにする。これを絶えさせるようなことがあってはならない。
明暦二年丙申（一六五六）
竹田金春八郎左衛門
奏安喜（花押）
六十九歳

正月二十一日
金春七左衛門殿へ

- 1 賦物 「風姿花伝」第二篇（四八頁注2）参照。
- 2 散楽事 申楽はもともと散楽（雅楽の反対語）の転訛で、本格的ならざる芸能を意味した。この用例は、その原義が残っている。
- 3 鬼人体 「人」は「神」の宛て字とも考えられるが、「形鬼心人」（二六一頁参照）の意味をこめて「人」の字を使ったものであろう。
- 4 大学に 「至花道」（二四一頁）参照。
- 5 その本乱るるや 底本「其本乱也」。従来「也」は「なり」とよまれているが、誤りであらう。
- 6 至花道に 一四二頁参照。
- 7 定位本風 「至花道」（二四一頁）参照。
- 8 孟子に 「至花道」（二四三頁）参照。
- 9 似たることは 「花鏡」（二〇七頁）参照。
- 10 類して斉しからず 「銀筵盛雪、明月威驚、類而不齊、混則知処」（宝鏡三昧）。
- 11 その者 一四三頁注2参照。
- 12 金春大夫 禅竹。
- 13 師家 先生という意の禅語。世阿弥をさす。
- 14 金春八郎 禅竹から六代目の金春座長。元和七年（一六二二）没。
- 15 金春八左衛門 安照の次男。竹田は姓、金春は座名、奏は本姓、安喜が名。寛文元年（一六六一）没。
- 16 金春七左衛門 安喜の養子。貞享二年（一六八五）没。

五音曲

「世阿弥十六部集」は「五音曲条々」と題するが、底本（松廬舎本）には「五音曲」という外題があったよし。宗節本は無題なので、いま「五音曲」という呼びかたに従っておく。本来は無題であつたらうか。内容は、音曲の様式を祝言・幽曲・恋慕・哀傷・閑曲に分類し、それぞれの特色を述べたものである。成立年代について、吉田博士は「大抵、世子五十歳前後の筆歟。之を至花道書（世子五十七八歳の作）に比すれば、老熟に欠くこと明けし」と論じたが、能勢博士は応永以後、永享二年（一四三〇）以前の著作であらうとし、川瀬博士は「曲付次第」「風曲集」等に近い時期、すなわち応永三十三年（一四二六）ころの成立と推定する。私見では、能勢説がいちばん穏当だと思われる。

同じく音曲に関する著作であるにも拘わらず、本書のような五種分類は「曲付次第」「風曲集」の所説にまったく反映していない。この五種分類の名目がはじめて見えるのは「申楽談儀」（永享二年成る）だから、能勢説のように考えるのが合理的である。さらに、この「五音曲」では、わたくしが世阿弥後期の特色と認める「却来」の思想を含むので、能勢説はいつそう確かさを増すであらう。

芸論として注目を要するのは、閑曲である。いまの謡で「乱曲」とか「閑曲」とか宛てられているものは、おそらくこの閑曲から出た特殊技法であらう。幽玄を究め尽した名手が「強さ」に却来した謡は、九位でいえば強細風であり「冷えたる曲風」に当たる。中期以前には、謡については説かれなかったところである。

テキストには観世宗家所蔵の宗節書写本と松廬舎本とがある。前者を底本とし、後者で校訂した。

音曲に、祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲、

これあり。

一、祝言とは、安楽音なり。直に云ひたるが、やすやすと下りて、治声なる響りなり。このやすく云ひ流したる響り(正体全き音、天政の位)を、大事に思ふ宛てがひ、また大事なり。拈弄すべし。

また、幽曲とは、以前の祝言に、響りを添へたり。声位を靡びやかに遣りて、曲を埋みて、上を美しくして、しかも正しき曲流なり。花月の夕・曙を、同時一見の眺めなり。体、用なるを、用を体にして、体を埋むよしなり。如し此の位を得て、その曲主となるを、能一の上手とは申すなり。

恋慕とは、これも柔和なる内にあはれを添へたり。何とやらん感ありて、あはれにすぎ曲聞なり。(これは曲聞の在所あるべし)。文字を少し詛る匂ひに彩どりて、曲を埋み、感を頭はす音聞なり。この詛ると云ふ声ざし、よくよく知るべし。そもそも、詛ると云ふこと、大事あり。詛るを、ただ悪きこ

謡には、祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲がある。

一、祝言というのは、世の泰平に安んじ楽しむ音である。飾りけなしに謡ってゆくのが、いかにも安らかに謡い流されて、治まった御代の声だなあと感じられるようなおもむきのものである。この安らかに謡ってゆくおもむき(本質的に正しく安全で天の道理に合致する境地)を、いちばん肝要な急所であるととることが、また大切である。趣味しなくてはならない。

次に、幽曲というのは、上記の祝言に、ある種のおもむきを加えたものである。基本的な声あつかいをしつとり謡い、謡趣を内にこめて、表面を美しくし、しかも本格的な謡いぶりである。花や月の美しい夕と曙の光景を、一時に眺めわたすようなものである。普通なら、体(譜で示し得る節)を主として、用(節に伴うおもむき)は自然にあらわれるようにするが、この幽曲では、その用を基本とし、体を内にこめる行きかたであるといわれる。こういう段階に到達して、その曲をマスターしきるのを、主体的統一の立場を得た名手と称する。

恋慕というのは、これもしとやかな曲であつて、そのうちに感動的な情趣を加えたものである。何となく深い感じがこもつていて、心を動かされるような、しんみりした曲のおもむきである。(そうした音曲的感動を与える所を用意せよ)。発音をすこし詛り気味にあしらい、謡趣をその内にこめて、深い感じをあらわす音曲表現である。この「詛る」という声づかいは、よく理解しなくてはならない。いったい、詛ると

とのみに一遍には思ふべからず。声明・伽陀などにも、詛る響きなくては叶はぬ曲所あるべし。軽重・清濁は上により、また、便音など申すことも、この詛る用音なり。よく詛り、あしく詛ること、是非の分け目、分明に知るべきなり。よき詛りは、音曲の花ともなるなり。それは「詛る」とも聞えまじきなり。ただ、詛りの内は是非を聞き分けること、堪・不堪の曲者によるべし。しかれば、柔和なる内に曲詛りを埋みて、あはれにすぎ音聞の響き、これ恋慕の姿懸りなるべし。さるほじに、「曲、体」「節、用」と謡ふべし。

いうことについては、重要な心得がある。詛るのを、すべて悪いことだと、単純に思いこんでしまつてはいけない。声明や伽陀などにも、詛る声づかいはなくては謡えないという部分が、どこかに有るはずである。発音の軽重や清濁は、上の語からの続きぐあいによつて適当にかわるといわれるのも、また、便音など称するものも、この詛る音のはたらきをさす。だから、良い詛りか悪い詛りか、詛りの善悪をはつきりと識別することが大切である。良い詛りは、謡の聞きどころともなるものであつて、それは、詛つても「詛っている」とは聞えないはずのものである。ただ、詛りのなかで善悪を識別することは、音曲についての造詣が深いか浅いかによる。それで、しとやかな内に謡趣の詛りをこめて、感動ふかく、しんみりしたおもむきの声を出すのが、恋慕の曲味だと考えてよいであろう。だから、恋慕は、謡趣を体とし、曲節を用とする謡いかたで行くべきものである。

1 安楽音 「治世之音、安以樂、其政和」(毛詩)大序。

三三九頁参照。

2 幽曲 幽玄すなわち優美な曲。

3 曲 底本「曲」と表記。したがつて「ふし」とはよまない。

4 能一 底本「能」。川瀬博士は「のういつ」とよむが、宗節本に従う。「能」はloveの意で、「所」(passage)に対する仏教語。自分からはたらきかけて統一す

る意であろう。この場合は、体と用の統一をさす。

5 すぎき 底本「スギキ」、松廼舎本「すぎき」。「世阿弥二十三部集」は「婁じき」と翻字するが、その拠り所

は不明。中世語の「すこし」は、ひっそりとした感じをあらわす。「大納言が」にはかに失せたまひぬ。使はれ人みな出で散りて、北の方・若君ばかりなむ、すこくて住みたまひける」(宇治拾遺物語 卷六ノ二)。

6 声明 本来は「音声学を主とする言語学」の意であつ

- 7 伽陀 サンスクリット *gāthā* の音写。歌謡の意。韻文に節をつけて諷誦すること。声明のひとつである。
- 8 輕重・清濁は上により 「音曲声出口伝」(二三三頁注 8) 参照。

- 9 便音 「花鏡」(二三〇頁) 参照。
- 10 用音 底本「用音」。
- 11 曲、体、節、用 「節」は譜で示しうる旋律や拍子、「曲」はそれに伴ってあらわれる趣(二二九頁参照)。「曲を体」「節を用」の意である。

哀傷とは、これまた哀れに(以前のあはれの悲声)感涙を催す心体なるべし。無常音の曲聞なるべきなり。およそ哀傷は、当世何ごとも祝言を以て本とするゆゑに、さのみ哀傷の曲聞をば斟酌あるべきなり。連歌などの一座にも、哀傷の部は、はや絶えたる分なり。しかれば、音曲にも、ただ大方の聞き耳あはれに、無常音を催す感聞ありて、曲の懸り美しくは、これ肝要の哀傷なるべし。

闌曲とは、高上の音声なり。万曲の習道を尽して、已上して、是非を一音に混じて、類して等しからぬ声のなす位なり。歌道にも、十体の中に、強き位を云ふに「鬼を取り拉ぐ」など申すは、この位にてやあるべし。

一、この条々、以上、これは、ただ詮ずる所、声懸にあるべきなり。そもそも、声懸りのこと、曲所に就きて大事あり。曲の奥儀とも申すべし。「悟り悟りて、未悟に同じ」と云々。すでにこの条々、祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲、ことごとくその謂はれどもを書して、その文言に従ひて、節・曲を付けたる懸りなれば、その曲体をよくよく習得して、能一に謡ふは、節体の形木なり。さて、その上に文をなすを曲と云ふ。この位までを究むるも、いまだ似たる曲分なり。この位をすでに忘れて、覚え知らず、感聞に頭はるる所、これ真の声懸りなり。この位を得たらんを、曲主とは申すべきなり。

1 哀傷の部は

和歌の勅撰集では「哀傷」の部があるけ

れども、連歌の準勅撰集「菟玖波集」「新撰菟玖波集」

哀傷とは、これも、哀れで(恋慕の音曲のあわれさに通じよ)涙のうかぶような心を体とした謡のことだといえよう。聞いた感じは、世のかなさをしみじみとあらわすような感じの音曲であるべきだ。この哀傷に関しては、現代は何事においても祝言的なのを本筋とする時勢であるから、あまり哀傷味の濃い曲は遠慮しなくてはならない。連歌を催す際なんかでも、哀傷の部はもう採りあげられなくなっている。従つて、謡の場合においても、だいたい聞いたところ哀れをさそい、無常音の感じを起させるような印象があつて、その曲のおもむきが美しくさえあれば、いちばんそれらしい哀傷だと思われる。

闌曲と称するものは、非常に程度の高い謡いかたである。あらゆる曲について鍛練しつくし、そうした境地に至りて後に、是風と非風との差別を超えて、いわゆる「似せる所までは行けるが、同じ所には行きつけない」ような謡のできる段階をいうのである。歌道においても、いわゆる十体のなかで強い表現の階層を拉鬼体などと称しているが、それは、この闌曲の位にあたるものかと思われる。これは、奥儀理解できるであろう。

一、五音の説明は以上で終わる。この五種の差は、詮じつめれば、声づかいのおもむきに帰するであろう。いったい、この声づかいのおもむきは、いわゆる「曲」(謡趣)について重要な点がある。音曲の秘訣だとも言いえよう。「悟りつめて、究極の悟りに到達してみれば、まだ悟らぬ境地と同じものだ」と言われている。以上に述べたところでも、祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲、そのいずれも、それぞれの素材を詞章に作り、その文句に従つて、ふさわしい節や曲をつけた結果のおもむきなのであるから、まず曲の根本を十分に体得したのを、わがものとしきつて謡うのが、すなわち節の骨格となるのである。さらに進んで、応用的なあつかいが加わったものを、曲という。しかし、この段階にまで至りえても、それは、まだそのとおり謡うという程度である。その境地をもうひとつ超えてしまひ、無意識に謡っているのに、おのずから人を感動させるような効果が音曲にあらわれるもの、これが真の「声のおもむき」というものである。この境地にまで至りえた人を、声趣をわがものとした人と称すべきだ。

にはその部が無い。連歌では、哀傷を述べ懐および無常のなかに含めて扱うからである。

- 2 已上して 「すでに上の段階に達して」の意。
- 3 十体 定家の十体。幽玄様・事可然様・麗様・有心体・長高様・見様・面白様・有一節様・濃様・拉鬼体。「毎月抄」に出ているが、後の定家仮托偽書「三五記」「愚秘抄」「愚見抄」などの類にも相述され、著名であった。
- 4 向去却来 底本「向去却来」。「世阿弥二十三部集」は「却来」を「けふらい」とよませるが、扱ひ所は不明。「名所旧跡おのづから、捨てて交はる塵の世の、夢も現

- も隔てなく、向去却来の境界に至る」(蘭曲「初瀬六代」)。観世流では「コオキョキヤクライ」と発音する。悟りを達成したあと、再び未悟の境地にもとること。「九位」(二九五頁注8)参照。
- 5 声懸 底本「声懸」。下の「声懸り」と同意。術語ふうに音読したもの。
- 6 声懸り 底本「コフカ、リ」。
- 7 悟り悟りて 自得慧暉和尚の句。「拾玉得花」(三二六頁注5)参照。
- 8 文 底本「アヤ」。

およそ音曲の姿懸りを数木と喩へて、その心を歌風を以て見する条々、付詞。

- 一、松木 祝言の姿。「万づ代を松にぞ君を祝ひつる千年の蔭に住まんと思へば」。
- 聖徳太子の御金言、「正法尽きて禪に移り、数木枯れて松にならん」と云々。松はもとより霊木として、古今の色なく、千秋の風姿、おのづから満目青山の粧ひをなせり。祝言の曲声、安全の感音をなす所、相当これあり。
- 一、桜木 幽曲。「またや見ん交野の御野

すべて音曲の様式やおもむきを、いろいろな樹木で喩え、また、その意味あいを、和歌の表現で示す諸項、および説明の詞。

- 一、松の木 祝言の様式。「万代を松にぞ君を祝ひつる千年の蔭に住まんと思へば」(君が万年の寿命を保たれることを、常緑の松で祝福することだ。自分は、その千年の松の蔭——長寿なる君の恵みのもと——によって生きながらえようと思うゆえに。)
- 聖徳太子の御教えにも、「正法期が終わつて、禪に移るようになり、多くの樹木が枯れて、松ばかり残るであろう」と仰せられたとか。松は、もともと霊木として、歳月に拘わらず常緑の色を見せ、千年もかわらぬ様子は、おのずから見はるかす天地自然の広大な光景をあらわしている。祝言の声趣が、治世安楽の感じをもつて響くところ、よく

の桜狩り花の雪散る春の曙」。

- 桜木は、もとより諸木の中の霊木として、唐・わが朝の春の色をなす景物たり。しかれば、曲音の匂ひ、詠歌の幽吟、さながら花・鳥の色・音を以て寵感をなすべし。
- 一、紅葉 恋慕。「下紅葉かつ散る山の夕時雨濡れてや鹿のひとり鳴くらん」。
- 紅葉は秋暮の情を見せて、色に染み、露をかなしむ粧ひ、恋慕怨声の思ひに通ず。
- 一、冬木 哀傷。「悪しかれと思はぬ山の峰にだに生ふなるものを人の歎きは」。

- これに相当するものがある。
- 一、桜の木 幽曲の様式。「またや見む交野の御野の桜狩り花の雪散る春の曙」(世にも美しいこのような景色も、再び見ることができようか、交野の御野の桜狩りの、花の雪が散りみだれる春の曙のこの景色を。)
- 桜は、もちろん諸木の中でのすぐれた木として、シナやわが国の美しい春景色を作るものである。したがって、幽曲では、その声趣のニュアンスや、謡つてゆく優美さは、あたかも花の色や小鳥のさえずりのようなふうにその美しい感じを表現すべきである。
- 一、紅葉 恋慕の様式。「下紅葉かつ散る山の夕しぐれ濡れてや鹿のひとり鳴くらむ」(紅葉の下葉が、かたえから散りそめる晩秋の山に、おりから降ってきた時雨に濡れながら妻を恋うて鳴いているのであろうか、あわれ深く鹿の音が聞えて来る。)

これは、花の春・紅葉の秋を経て、霜に責められ、雪に埋れて、葉落ち、枝変じたる冬木立、さながら哀傷・望憶の気色深し。

- 一、杉木 蘭曲。「いつしかと神さびにける香具山の鉾杉がもとに苦むすまで」。
- 杉木は、これ、粧ひいや閑けて、神木、霊社の御蔭を囲みて、諸木に類して等しからぬ遠見あり。しかれば、曲懸り異なる響き、閑声類ひなき風聞、杉木を以て喩へとす。よくよく習道して、声懸りをなすべし。

- 紅葉は、晩秋の心情を如実に示して、色深く、露に心を動かされるようなその様子は、恋慕のなげきの思いに通うものが感じられる。
- 一、冬の木 哀傷の様式。「あしかれと思はぬ山の峰にだに生ふなるものを人の歎きは」(別に悪くあれかとも思っていない山の峰にさえも、投げ木——歎き——は生えるものですのに、まして、うち捨てられた自分に、歎き悲しむ心が深いのは当然でしょう。)

これは、花の春や紅葉の秋を経て、あるいは霜にいためられ、あるいは雪に埋もれて、葉も落ち枝ぶりも変わった冬の木立のようなもので、哀傷や望憶の思いがそっくり表現されているように感じられる。

一、杉の木 闌曲の様式。「いつしかと神さびにける香久山の鉾杉がもとに苔むすまでに」(いつのまにか早くも香久山の鉾杉も森厳な姿になって来たことだ、そのもとに苔が生えるまでに)。杉の木は、見た目がひととき

壮高で、神木として靈域をめぐって聳え、遠方からながめても、一般の木とはちがった様子を示すものである。それで、闌曲における曲のおもむきが、他とは異なった響きのある点や、壮高な声づかいの比類のない感銘なども、この杉の木で喩えたのである。しつかり習いきわめて、そのおもむきを謡うべきである。

- 1 万づ代を 「古今集」 卷七・三五六。素性の歌。
- 2 聖徳太子の御金言 出典不明。俗説であろう。
- 3 満目青山 「九位」(二九一頁注6) 参照。
- 4 安全 「なほ安全ぞめでたき」(能「難波」・「四海安全に国治まり」(能「大社」)などの「安全」は、諸流で「アンセン」と発音されている。
- 5 またや見ん 「新古今集」 卷二・一一四。俊成の歌。
- 6 桜木は 底本「桜木ハ」。振り仮名の「キ」は誤写と見て、改めた。
- 7 下紅葉 「新古今集」 卷五・四三七。家隆の歌。
- 8 悪しかれと 「詞花集」 卷九・三三三。和泉式部の歌。
- 9 いつしかと 「何時間毛神左備郎留鹿香山之鉾相之本尔薛生左右」(「万葉集」 卷三・二五九)。鴨君足人の歌。普通の訓と違うが、当時このような訓があったのか、世阿弥の誤りか、明らかでない。
- 10 闌けて 壮大な高さを感じさせ、杉の木は優美な趣がなく、そびえ立つ木なので、九位における強細風のような「強さ」の感じを響せる。

一、祝言の音曲 本声の姿。
「それ久方の神代より、天地開けし国の起り」の謡ひ物、これらを以て本声とす。
一、幽曲の音曲 本声の姿。(幽曲は五音曲に通ずる曲風なり。)

一、祝言謡の規範的な様式。
「それ久方の神代より、天地開けし国の起り」という謡のようなものを、その本格とする。
一、幽曲謡の規範的な様式。(幽曲は、五音曲に共通したタイプの声趣である。)

「日折りせし、右近の馬場の木の間に」
「ひをせりし、右近の馬場の木の間に」という謡のおもむきは、幽曲である。だいたい、応永年間このかたの謡や節曲舞などは、いずれもみな幽曲というべく、いちいち例をあげるにも及ばないと思う。

一、恋慕謡の規範的な様式。
「忍ぶれど、色に出にけり我が恋は」の謡、これが恋慕謡の本格的なおもむきである。そのほか、「松風村雨」の後の段、「班女」「みそぎ川」の曲など、これらはみな恋慕を主眼としている。
一、哀傷謡の規範的な様式。
「一生は風の前の雲、夢の間に散じ易く」という謡など、哀傷曲の本格的な姿である。

一、闌曲謡の規範的な様式。
「それ一代の教法は、五時・八教をけつり」という謡なんかは、闌曲の本格的な姿である。「上宮太子」の節曲舞や「白鬚」の曲なども、闌曲である。また、節づけない部分は、闌曲である。
一、哀傷音曲。
「一生は風の前の雲、夢の間に散じやすく」の謡 哀傷の本風なり。
一、闌曲音曲。
「それ、一代の教法は、五時・八教をけつり」の謡。 闌曲の本風なり。「上宮太子」の節曲舞・「白鬚」、この響りなり。また、只詞、 闌曲なり。

- 1 それ久方の 祝言小謡「伏見」の文句。「五音」(三六八頁) 参照。
- 2 幽曲は五音曲に通ずる曲風なり 底本未注。
- 3 日折りせし 能「右近」の文句。
- 4 右近の馬場の 底本「ウコンバンノ」。松廼舎本により訂正。

- 5 忍ぶれど 出所不明。能ではなく、謡い物の文句か。法政大学能楽研究所に蔵される上杉本「乱曲集」所収の「権見千寿」にこの文句が見える（片桐登氏論文）。
- 6 松風村雨 現行曲「松風」の古名。
- 7 祓川 底本に無し。松通舎本により補う。ただし、如何なる曲か不明。
- 8 哀傷音曲 底本「アイシヤウ々々」この「々々」が何をあらわすのかは不明だが、幽玄の条の標目が底本では「幽玄ノ々々本声姿」と表記されているのから考え、いちおう「音曲」とよんでおく。

- 9 一生は風の前の 能「鍾馗」のクセにこの文句が見えるけれども、何か他の謡い物から引いたのであろう。「五音」(三七〇頁) 参照。
- 10 関曲音曲 底本「関曲々々」。
- 11 それ、一代の 能「自然居士」の文句。ただし現行曲には無い。「五音」(三七二頁) 参照。
- 12 上宮太子 関曲として現存。クセだけなので「節曲舞」といった。「五音」(三七五頁) 参照。
- 13 只詞、関曲なり 節づけしない部分は、実は節の極致ともいべき息あつかいだと考えたのであろう。

およそ関曲に同音の俱行はあるべからず。自他別にして、また知音の道あり。そもそも、関曲に俱行あるべからざる曲道大事あり。そのゆゑは、安位に座断して、何とも即座の気転によりて出で来る曲なれば、同音の連声、曲の道あるべからず。ただおほかた、堪能と堪能は俱行可有有歟。それも節までは俱行あるべし。曲に至りては、連曲不同になるべし。曲は、思はず知らず出で来る気音なり。しかれば、一人一人の達声として、自他一音の曲道はあるべからず。

一、すべて、関曲においては、二人以上の同吟ということは、有りえない。自分のうたう関曲と他人のうたう関曲とは、同じ謡でも別ものであつて、しかもどこか通じあう謡いかたの筋がある。いったい、関曲において、二人以上の者が同吟できないとせられているのは、謡の道として重大な筋あいがあるからだ。そのわけは、関曲というものは、すっかり安定しきつた芸に腰を据えて、どのようにも、その場の息づかいで生まれる声趣なのであるから、同音での連吟などは、うたう方法の有りえようはずがない。ただ、すぐれた達人どうしのあいだでは、いちおう連吟する可能性も有りうるかと思われるが、それにしたところで、節までは同吟することも可能だが、「曲」(声趣)に至つては、連吟しても不同にならざるをえない。「曲」というものは、う

心得べきなり。この曲道を分別して、その曲主となること、音曲の奥儀なり。秘伝なり。およそ曲付する所の節体の形木の、関曲までは俱行あるべきなり。深く秘すべし、秘すべし。

一、詩序に云ふ、「治世之音、安以樂。其政和。乱世之音、怨以怒。其政乖。亡国之音、哀以思。其民困。故、正得失、動天地、感鬼神。」

一、「天之命謂之性、循性謂之道」云云。しかれば、性は天、道は地なるべし。これを音曲の次第にとらば、祝言は性なるべし。この性を和して懸りとなす体を幽玄と云ふ。また幽玄をなほ深めて感文を添ふる位を恋慕と云ふ。恋慕に亡曲の心を付けて哀傷と云ふ。これらを習道し終りて、安位に至り至る達音を関声と云へり。これすなはち、道なり。これ、当道の音曲を究むる分なり。

一、大学に云ふ、「其本乱、未不治」

たう当人さえも意識せずに息づかいから生まれる特殊な音趣なのである。だから、個人個人の達人芸としてのみ有りうるものであり、二人以上が同音にうたいうる道理などは無いのが当然である。よくこの点を理解しなければならぬ。この関曲の筋あいをよく理解して、声趣をわがものとすることが、謡の奥儀であり、秘伝とするところである。だいたい、作曲をする節の型は、関曲以前の段階では、二人以上が同音にうたいうるものと心得てよい。他人に知らせてはならない。

一、「毛詩」の序に、「泰平の世の歌声は、安らかで楽しい響きがある。これは、その世の政治が安定しているゆえである。また、世が乱れた際の歌声は、恨み怒っている響きがある。それは、その世の政治が正しく行なわれていないゆえである。また、亡びようとする国の歌声は、悲痛で憂愁の響きがある。それは、その国の人民が苦しんでいるゆえである。それで、詩は、よい事・わるい事を明らかにし、天地を感動させ、幽魂をも感ぜしめるものだ」といわれている。

一、「天の志向するところを性と称し、性のとおりに実践するのを道」といふといわれている。そうすると、性は天にあたり、道は地に相当するものと考えられる。これを五音曲の順序にあてはめてみると、祝言はさしずめ性であろう。この性を優美化して、おもむきの美しさとした姿が幽玄である。また、幽玄をもうひとつ深めて、人を感動させるような文を添えた段階が恋慕であり、その恋慕と亡き者を思い慕う感じを合わせたのが哀傷である。これらをすっかり修行して、安定

云々。万とは「一力」なり。この祝言・恋慕・幽曲・哀傷も、祝言の安全音の力なり。いづれも、その音を全く謡ふは、みな安全なり。安位に座断する位、闌懸なり。これ、初めの安全音に帰るは、「一の力」なり。これ、習道の能一なるゆゑなり。「その本乱れずして、未治まる」になるなり。しかれば、ただ、稽古の正力を守るべきなり。

「一の力」なのである。これは、修行がひとつの中心的なものをもってゆるゆるである。「その本乱れずして未治まる」ということになる。だから、ひたすら研修の正しい基本への努力を怠ってはならない。

しきつた境地に至りえた達人の謡を聞声というのである。このように進むのがすなわち「道」なのである。そして、これが、わが芸において謡を究めてゆくやりかたである。

一、「大学」に、「その本が乱れると、末もきちんとしてはいない」という語がある。また、「万」の字を分解すると「一の力」である。この祝言・恋慕・幽曲・哀傷なども、その根柢は、祝言に含まれる治世安楽音の力に在るのだ。いずれの音曲でも、その音を完全に謡えば、みな治世安楽音だと言える。安定しきつた境地にまで達しえた芸は、杜荒のおもむきがある。それがはじめの治世安楽音にかえりうるのは、

1 座断 本来は、迷いを断ち切る意の禪語だが、世阿弥は着座の意に用いる。

2 気転 従来は現代語の「気転」と同じ意に解しているが、これは「気の扱いかた」の意であろう。闌曲のうたいぶりを聴くと、息づかいに特殊な扱いがあり、それが闌曲の根本であるように思われる。

3 気音 「気合ひの音」(能勢説)・「はづみの音」(川瀬説)など解されているが、前項の理由で、息の特殊な扱いから生まれる音の意に解した。

4 曲付する所の 底本「曲付為トコロ」。

5 詩序 「毛詩」大序。三五一頁参照。

6 天之命謂之性 「中庸」の文句。

7 これを音曲の 底本「此音曲ノ」。従来は「この音曲の」とよまれているが、適当でない。

8 亡曲 川瀬博士は「望憶」の誤りであろうとするが、本文どおりでも通ずる。

9 安全音 底本「安全音」。「イ」は中世文献で撥音の表記にも使われる。例「紫宸殿」。三三三頁注4参照。

10 闌懸 底本「闌懸」。

11 未治まるになるなり 底本「未治二成也」。松廼舎本

「未治る者也」。一四一・三三五頁参照。

一、音曲習道の次第とは、音声の下地は使声なり。声をよく使ひて、曲をなすに従ひて、たとひ不足なる声なりとも、使ひをりて、何とも心のままなる声位にならずは、麗はしき音曲の上果にはなるまじきなり。さるほどに、使声を以て音曲の下地とす。さて、節をよくよく師に習ひて、その形木に入りふして習得すべし。この位もいまだ初心の分なり。そののち、声の横堅を心得て、文字に因りて、横に当たるべき声をば横に当たり、縦に当たるべき声をば縦に当たりて、相音に謡ふべきをば地声にして、次第梯登に、習道の稽古に至るべし。習道とはこれまでなり。この上は不伝の曲分なり。

曲をば習はぬ道あり。そのゆゑは、曲と云ふべきものは真には無きものなり。秘すべし。もしありと云はば、それはただ、節なるべし。さるほどに、相伝すべき形木

一、音曲を習ってゆく順序について言えば、謡の基本は、声の使いかたである。声の練習をしつかり積んで、声趣が生まれるにつれて、たとえ生まれつき不足な声であっても、使っているうち、どのようにも、思いどおりうたえるような段階の声に至るのでなかったならば、すぐれた謡の最高の位には、なりうるものではない。こういうわけだから、声を使うことを謡の基本とするのである。さて、次には、節もよくよく師に習い、その型の中に入りきって、身につけるようにせよ。しかし、この程度では、まだ初心の段階である。その後、声の横と縦を心得て、うたう語により、横に配して謡うべき声は横に配し、縦に配してうたうべきものは縦に配し、横と縦を兼ねた音に謡うべきところを基本の声として、順序に従い研修を進めなければならぬ。そして、研修できるのは、これまでのところで、それ以上は、伝えることのできない「曲」(謡趣)という世界に属するのである。

「曲」には、学習できない筋あいがある。なぜならば、「曲」というべき実体は、無いのである。(これは秘密だ)。もし「有る」というならば、それは、「曲」でなくて、単なる節だろう。したがって、「曲」には、学習させる定型も無いわけである。「曲」は、前に述べた基本としての声使いから始めて、節の学習、横堅や両音を兼ねた声のことなど、これらをすっかり身につけて、わがものとなしきつた達人の謡として

もなし。これは、以前の^{いぜん}下地^{したち}の使声^{しせい}より、節^{せつ}の習^なひ・横^{おこし}・横^{おこし}・相音^{あいおん}、如^{かく}此^{この}の条^{じょう}々^{じょう}をよくよく究^{きう}めて、達音^{たつおん}能^{のう}一の安声^{あんせい}に坐^まりて、おのづから出^いでたる用音^{ようおん}の花^{はな}薫^{かんとん}を、曲^{まが}とは云^いふなり。これは、習^{しゆ}劫^{せつ}を積^たみたる得音^{とくおん}なり。しかれば、節^{せつ}は有^あり、曲^{まが}は無^なきなり。この位^{らい}に至^{いた}りて、名^なを許^{ゆる}され、道^{みち}を得^えて、すでに師家^{しけ}の印^{いん}可^かを得^えてこそ、われもまた、師家^{しけ}とはなるべけれ。かへすがへす、曲^{まが}は習道^{しゆどう}には無^なきものと知るべし。さて、無^む曲^{まが}の在^{ざい}所^{じよ}をば、何とか云^いふべき。もし、声^{こゑ}懸^{けん}りのみか。また云^いふ、声^{こゑ}を使^{つか}ひ、声^{こゑ}に使^{つか}はるる在所^{ざいじよ}あるべし。声^{こゑ}を使^{つか}ふは節^{せつ}なり。声^{こゑ}に使^{つか}はるるは懸^{けん}りなり。ここに曲音^{まがおん}あるか。見^{けん}所^{じよ}人の心^{こゝろ}耳^{みみ}に通^{とほ}ずるか。見^{けん}所^{じよ}も、かならず聞^き得^えるは限^{かぎ}るべからず。女^{おんな}・童^{わらわ}の心^{こゝろ}耳^{みみ}にも感^{かん}ずる所^{じよ}、これすなはち曲^{まが}にてやあらん。また、声^{こゑ}懸^{けん}とや云^いはん。これは皆^{みな}、思^{おも}はず知らず、五音^{ごおん}・四声^{ししやう}のなす感音^{かんおん}なるべし。不^し知^ち々^々々^々。

安定した境地にまで到達し、おのづから謡にあらわれるみごとなニュアンスを「曲」というのである。これは、特別な修行を重ねることによつて悟りえた音である。したがつて、節は有であり、曲は無である。この境地に到達して、世間でも名声が高く、「曲」の道を体得して、師匠から奥儀に達したという認証を与えられてこそ、自分もまた師匠となりうるのである。どこまでも、「曲」は学習ではとらえられないものと心得るがよい。さて、この無なる「曲」の在りかたを、どう言いあらわしたらよからうか。あるいは「おもむき」だけのものというべきであろうか。また、声を使う行きかたと声に使われる行きかたがあるが、その声を使うのは節であり、声に使われるのは「おもむき」である。この声に使われる「おもむき」に「曲」という音があるのだろうか——とも言われる。あるいはまた、観客たちの深層感覚に通ずるところに「曲」があるのか。しかし、観客たちもかならずしも聴き上手だけとは限らず、女や子ども達の深層感覚にもその妙の感じられるようなところが「曲」なのであろうか。また、「おもむきとしての声」というべきであらうか。これらは、まったく意識しないうちに、音階やアクセントの扱いから生まれる音楽的感動なのであろう。知識的には理解できないものである。

- 1 使声 底本「仕声」。
- 2 使ひをりて 底本「ツカイヲリテ」。松廼舎本は「つかひたりて」。「た」は「於」の草体からの誤写か。
- 3 声の横登 『風曲集』(二五八頁) 参照。
- 4 相音 『音曲声出口伝』(二三三頁) 参照。
- 5 次第梯登 底本「次第テイトウ」。「世阿弥二十三部集」は「次第平頭」と翻字し、平等の宛て字と注するが、振り所は不明。松廼舎本も「次第ていとつ」。
- 6 無きものなり 底本「ナキ物也」。
- 7 花薫 底本「花匂」。松廼舎本は「花匂」。訳文では意訳しておいた。
- 8 得音 底本「トクラン」。習得した音。
- 9 かならず 現代語の「かならずしも」に当たる。「先達どもも、かならず歌の音悪にはよらず」(後鳥羽院御口伝)。一九一頁注2参照。
- 10 聞得 従来は「聞き得る」の意に解されてきたが、これは下の「女童」に対し、正確に聴き得る能力のある者の意であらう。